

## 6. 生活様式としてのアーバニズム

パークの理論の基本線——生態学的決定理論と社会解体論（コミュニティの衰退）。

シカゴ・モノグラフも社会解体論の鋳型にはめられる。

やがて、ワースの論文「生活様式としてのアーバニズム」（Wirth 1938）に継承される。

（コミュニティ存続論や下位文化理論の側面は切り捨てられる）。



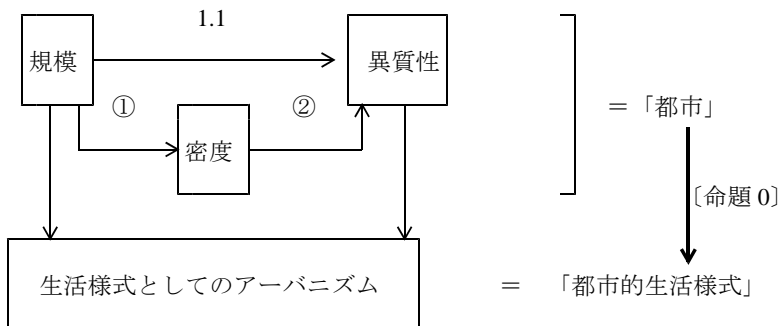
### （1）理論構造

- 「都市」が「生活様式としてのアーバニズム」を生み出すという「都市効果」理論。
- 「都市」とは「社会的に異質な諸個人からなる、相対的に大きな・密度の高い・永続的な居住地」。つまり、規模が大きく、密度が高く、社会的異質性の高いコミュニティ。
- 「生活様式としてのアーバニズム」とは、このようなコミュニティに特徴的な生活様式。

「規模が大きければ大きいほど、密度が高ければ高いほど、また異質性が大きければ大きいほど、よりアーバニズムと結びついた特徴は促進される」。

※アーバニズムとは、本来、「都市生活」の意味。ワースの場合、都市に特徴的な生活様式を「生活様式としてのアーバニズム」と呼ぶ。

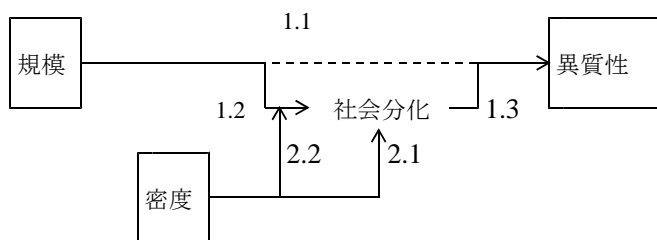
図A 基本的変数間の関係



①ワースは述べていないが、規模（人口量）が増大すれば、密度が増大するのは定義によって明らか。

②「密度」は「規模」とともに「社会的分化」を促進することによって「異質性」を増す。この点については、命題 1.1 を含めて、以下に別出する。

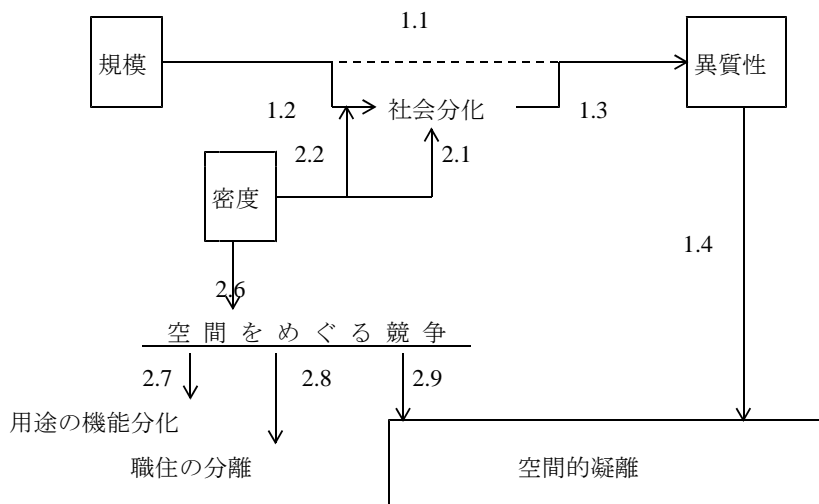
図A' 異質性の位置づけ



(2) 生活様式としてのアーバニズム

- 規模の効果：大量人口の相互作用→社会的分化（社会的異質性の増大）→空間的凝離。  
匿名性→人間関係の分節化→親密で個人的な「第一次的関係」の弱体化  
→表面的で非人格的な第二次的接触が優勢に。  
→無関心・憤り・飽き、世間ずれ、合理性などの都会人の社会的性格。  
→自由と解放、参加の感覚の喪失。  
職業の専門分化・企業組織の発達（←人口規模の結果としての大市場）。  
都市生活は市場に依存し、不安定になる。  
マスメディアの発達、代表制の発達。
- 密度の効果：空間をめぐる競争→用途の機能分化・職住の分離。  
階級別・人種別の住み分け→さまざまなライフスタイルの併存→相対主義  
・相違への寛容。  
物理的には近接しているが社会的には疎遠な接触様式。視覚的認識が優位に。  
人工の世界への感覚が発達し自然からは遠ざかる。  
愛着のない、孤独で、フラストレーションにさいなまれる個人。  
競争・出世・利用の精神→無秩序への傾向。フォーマルな統制が必要となる。
- 異質性の効果：多様なパーソナリティによる相互作用→社会階層の複雑化と流動化→社会集団に一時的に分属→個人の原子化・流動的大衆の形成。  
分業と大量生産の出現→生活様式の平準化。マスメディアによる政治過程の大衆化。
- 空間的凝離（職住の分離、人種別・階級別の住み分け、多様なライフスタイルの併存）。  
→バージェス以来の都市生態学の伝統。

図B 空間的凝離



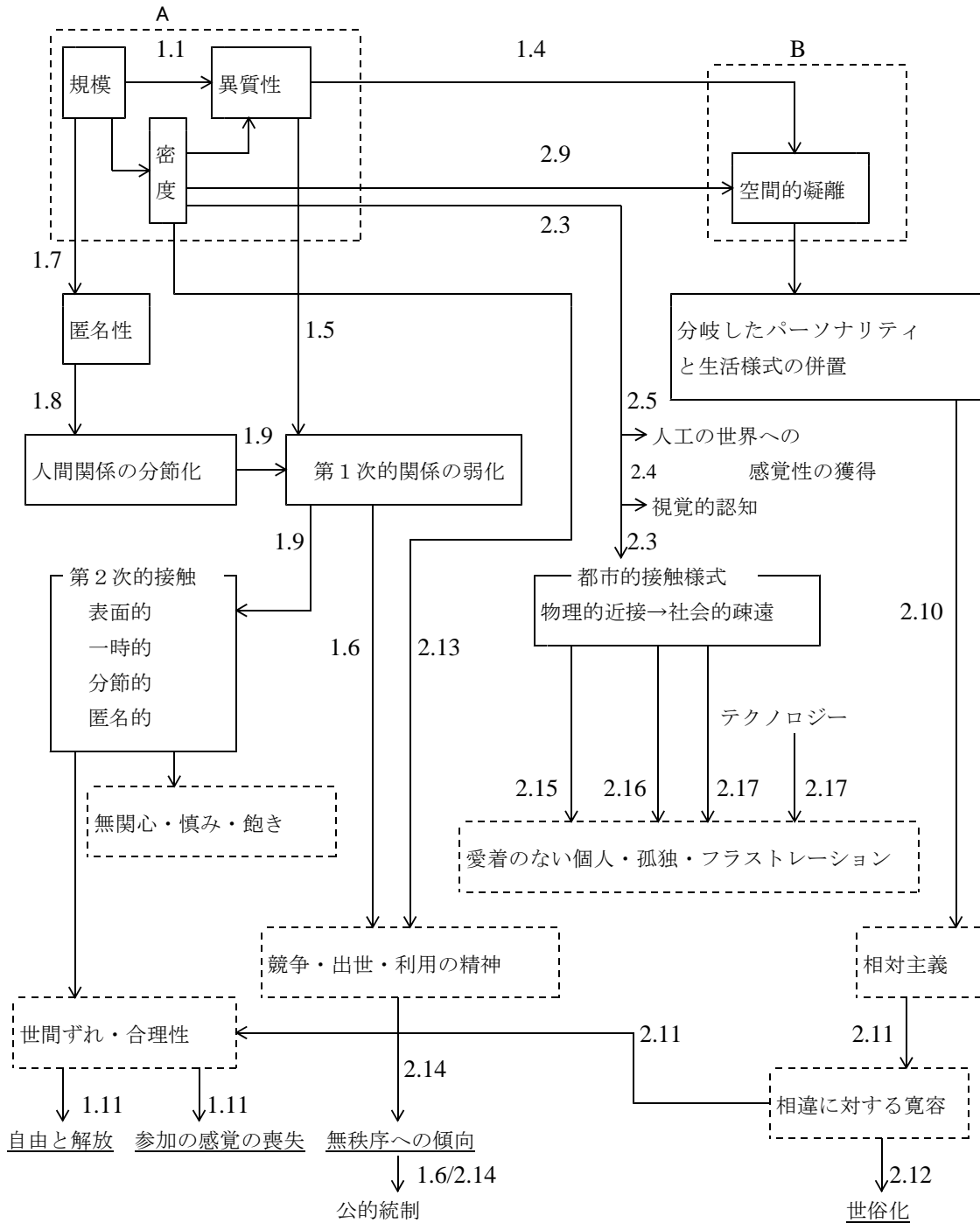
●都市的社會關係（親密で個人的な第一次的關係の衰退と表面的、一時的、非人格的な第二次的關係の優位、）。

→トマス、パーク、バージェスと引き継がれてきた、社會解体論（コミュニティ衰退論）。

●都市的パーソナリティ（無關心・慎み・飽き・世間ずれ・合理性・世俗主義・愛着のない個人、孤独、フラストレーションなど）。

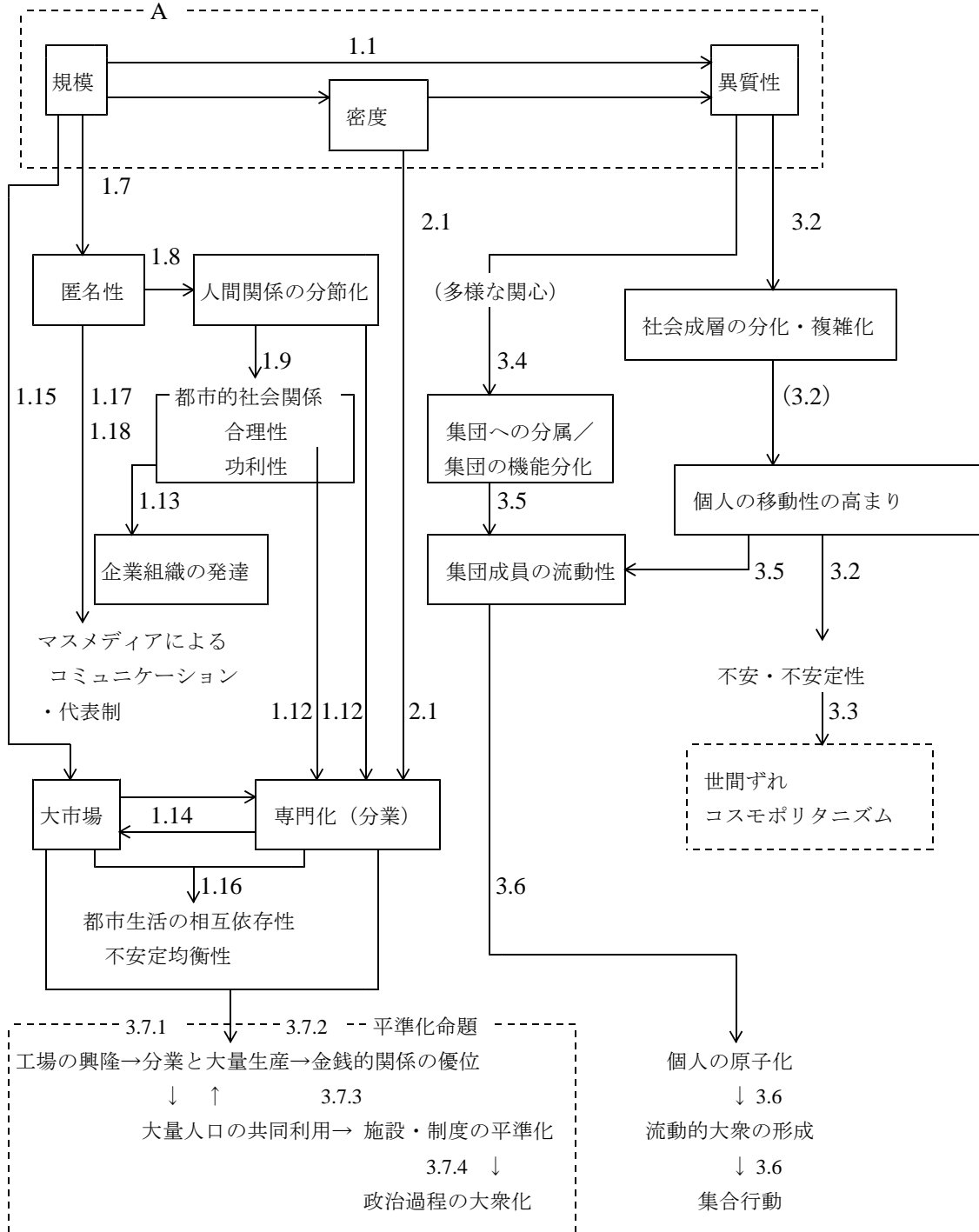
→ジンメル、パークなどの議論を再現。

図C 都市的社會關係と都市的パーソナリティ

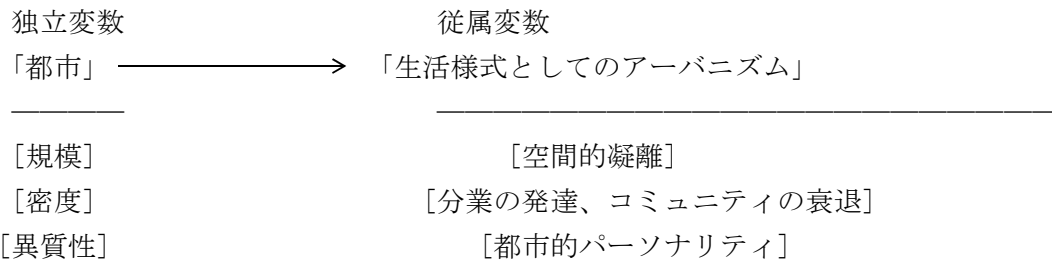


●分業の発達と大衆化（流動的大衆の形成、集合行動、生活様式の平準化、マスメディアの発達、大衆政治）  
 → 1930年代の都市大衆社会を描き出す。（大量生産・大量消費時代の幕開け）。

図D 分業の展開と大衆化



### (3) アーバニズム理論批判の論理



#### ●従属変数に対する批判

「都市的社会関係と都市的パーソナリティ」は事実に反する。  
コミュニティ衰退論（社会解体論、大衆社会論）ではなく、コミュニティ存続論を支持する実証研究が相次ぐ。

#### ●独立変数に対する批判

「都市」だけから、都市における生活様式を説明するのは無理。  
都市の社会構造に関する理論が必要。社会構成理論からの批判。